

田中 研之輔ゼミ 2023年度卒業論文要旨一覧

No	学生証番号	執筆者氏名	タイトル
1	19M0207	小島 和春奈	現代社会における女性の働き方～女性活躍社会と育児～
2	20M0106	青嶋 雄大	森林浴の可能性と必要性 注目される日本の森林浴
3	20M0112	里見 帆乃香	ビューティースタンドを取り巻く現状とこれから 日本の若年女性に着目して
4	20M0113	玉谷 胡花	学生主体の訪問販売ビジネスにおける労働条件とその後のライフプランの関係性
5	20M0204	閨間 咲稀	清原和博氏の薬物依存にみるプロ野球選手とドーパミン依存症の関連性
6	20M0313	澤 勇樹	努力は報われないと思う人が報われると思うには何が必要か
7	20M0605	佐藤 凜	ダークツーリズムによる記憶の継承と心理的影響
8	20M0614	植木 紗羅良	大学生の「やりたいこと志向」とキャリア選択の関連性
9	20M0807	金山 志穂	大学生における苦しみからの脱却と成長 ～心的外傷後成長とストレス関連成長の観点から～
10	20M1008	幸田 純徳	～大学生と生成AIと大学～ ChatGPTを活用した卒業論文の書き方
11	20M1201	保田 恵汰	コロナ禍での大学生の停滞感と そこからの脱却についての質的研究
12	20M1415	密原 玲奈	大学生における先延ばし傾向と学業遂行の関連性

現代社会における女性の働き方 ～女性活躍社会と育児～

田中ゼミ 19M0207 小島和春奈

論文要旨

本研究は、女性の社会進出が求められるようになった現代において女性の社会進出と出産・育児の両立支援が求められる中、実際に働く女性が置かれている状況を明らかにし、課題の改善に向けた示唆を得ることを目的とした。

日本の女性の就業率における M 字カーブは改善傾向にある一方で、L 字カーブは変わらず、出産・育児後の女性の労働参加率の低迷が課題となっている。加えて、少子高齢化対策や物価高騰による生活費の増加から、女性の稼ぎが重要視されつつある。しかし実際には、育児と仕事の両立は容易ではない。

そこで本研究では現在子育てをしながら正社員として働いている人とパートタイム、で働いている人それぞれにインタビューを行い、女性の働き方における調査をおこなった。

結果、正社員として働きたくても、育児があるからと採用してもらえないケースが少なくない。また、正社員として働いていても、育児に専念する時間を確保する必要から、残業が制限されたり、昇進の機会を逸したりする現状がある。

要するに、社会的には女性の活躍が求められながら、個別の事情としては育児と仕事の両立への支障が大きい。こうした個人と社会の間にあるジレンマが、女性のキャリア形成を阻む一因となっている。

一方で、先行研究よりパートタイム労働を選択することで、育児と仕事の両立を実現しているケースもみられた。

以上から、女性が働きやすい社会を形成するには、パートタイム労働の処遇改善により正社員との格差を埋め、フルタイム労働への移行を容易にすることが有効だと考えられる。女性の社会進出における問題は 2050 年問題等とも深く関係がありそれだけではすべて改善されることは難しいが、パートタイムや時短勤務の在り方は女性が望む形で継続就業できる環境を整え、合理的なキャリア選択を可能にできるだろう。

森林浴の可能性と必要性 注目される日本の森林浴

田中ゼミ 20m0106 青嶋雄大

本論文では、森林浴の可能性と必要性について研究を行う。現代社会の問題は多岐にわたる。特に SNS 関連のストレスや同調圧力が著しく増加している。このような状況において、森林浴やキャンプの重要性が際立ってくる。内閣府の行った森林に癒し等のレクリエーション機能を求める人の割合が、15.5% (1999 年) から 13 年後には、27.7% (2011 年) と大幅に増えている。(Ishizaki,2013) 現代社会において、我々は日常的に SNS やデジタルテクノロジーに囲まれ、情報過多やデジタルストレスにさらされている。ソーシャルメディアの普及は、つながりや情報の共有を促進する一方で、競争や比較、自己主張によるプレッシャーをもたらしている。こうした環境は、心理的なストレスを増加させ、個人の幸福感に悪影響を及ぼす可能性がある。

こうした問題の中で、森林浴やキャンプは非常に重要な役割を果たす可能性があると考えた。調査の結果、ストレスからの解放には日常的に自然環境との機会を作ることが必要であることが明らかになった。森林浴を通じて、喧騒やデジタルワールドから遠ざかり、自然の美しさと静けさを体験することで、心が安定し、精神的なリフレッシュが促進され、身体的にも健康があることが明らかになった。さらに、自然レジャーにおける森林浴は自己認識の機会を提供する場としても有効的である。自然の中での静かな時間を過ごすことで、個人は自分自身を見つめなおすことができる。同調圧力から解放され、本来の自分と向き合うことは、自己肯定感を高め、ストレス軽減に貢献することが明らかになった。日常的な森林浴が個人の持続可能なウェルビーイング状態を可能にすることが明らかになった。

ビューティースタンドードを取り巻く現状とこれから —日本の若年女性に着目して—

田中ゼミ 20M0112 里見帆乃香

1 目的

SNS の影響や自己肯定感の低さなどを理由に、過剰な美容行動が増加している。そこで本研究では、現代日本の若年女性が抱えるビューティースタンドードの現状と問題点を実態把握と背景分析から明らかにすることを目的としている。

2 方法

本研究では現代日本の若年女性のビューティースタンドードの現状分析のために、自己肯定感・整形観・痩身志向・SNS による影響に関して、大学生 3 名を対象にしたインタビュー調査（2023 年 11 月実施）を用いてデータを収集し、それらをテーマ分析の手法で分析した。

3 考察

インタビュー調査や文献調査から、若年女性のビューティースタンドードは痩身志向が強く、整形への許容度も高いという結果が得られた。さらに、自己肯定感の低さに関しては、外見へのこだわりが高く、他者からの評価に左右されやすいという結果が明らかとなった。

すなわち、現代の若年女性は SNS の影響を強く受け、固定化されたビューティースタンドードを内面化し、それに合致しようと過剰に努力している姿勢がうかがえる。自己肯定感の低さが外見や他者からの評価への依存度を高め、摂食障害や整形依存症を始めとする精神的・身体的な健康被害を引き起こすほどのビューティースタンドードへの執着を招いている実態が明らかとなった。

4 結論

以上のことから、現代の若年女性は外見の美に対するビューティースタンドードに生き辛さを感じ、自身の容姿をよりその基準に近づけようと必要以上に努力をしているといえるだろう。本研究は、若年女性の過剰な美容行動の背景にある要因を明らかにした点で、健康的で多様性を尊重する社会の実現に資する知見を提供した。本研究の限界としては、インタビュー対象者が少人数で限定的であることから一般化には課題が残る点が挙げられる。

学生主体の訪問販売ビジネスにおける労働条件とその後のライフプランの関係性～アイデンティティ形成過程のエスノグラフィ～

田中ゼミ 20M0113 玉谷胡花

1. 目的

訪問販売への学生の就労が増加しているのにも関わらず、その労働条件とキャリア形成の関係性を実証的に検証した研究は少ない。そこで本研究は学生がインターンとして訪問販売の労働に従事することにより、その後の人生設計やキャリア形成にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的としている。

2. 方法

本研究では、訪問販売の労働経験と学生のキャリア形成の関係性を明らかにするために、フィールドワークと訪問販売経験学生 4 名を対象にしたインタビュー調査（2023 年 4 月実施）を用いてデータを収集し、それらをテーマ分析の手法で分析した。

3. 考察

本研究の調査から、訪問販売の労働経験が学生の職業観の形成に影響を与える実態が明らかになった。将来の仕事観がより現実的なものへと変容するなど、自己成長への寄与がうかがえる。

また労働の自由度の高さが、時間管理能力や自信を高め、起業意識に繋がることが示唆された。訪問販売の経験が学生のキャリア選択に少なからず影響していることが確認できた。

4. 結論

以上のことから、訪問販売の労働が学生の主体的な職業観の形成に寄与していることが判明した。

本研究は学生の訪問販売労働の意義を実証的に明らかにしたという点で意義がある。本研究の限界としては学生の参入動機は判明したが、目標達成の頻度や結果に対する研究を行っていない点である。今後は学生と社会人の違いを明らかにし、訪問販売にとって優秀な学生の育成に必要な要素はどのようなものかを検討する必要がある

清原和博氏の薬物依存にみる プロ野球選手とドーパミン依存症の関連性

田中研之輔ゼミ・20M0204 関間咲稀

1. 目的

本研究では、元アスリートが引き起こす犯罪や依存症が一般的にセカンドキャリア問題とされる中、プロ野球選手の「刺激」と「ドーパミン」を探求し、これが現役中および引退後のメンタルヘルス課題にどのように影響するかを明らかにする。特に、元プロ野球選手の清原和博氏の薬物依存事例を通じて、その背後に潜む問題点を明示し、同様の事態を未然に防ぐための予防策を提案することが目的である。

2. 方法

本研究では、プロ野球選手とドーパミン依存症の関連性を明らかにするために、NPBに所属する現役プロ野球選手2名、元プロ野球選手2名を対象にインタビュー調査を用いてデータを収集し、それらをデータ分析の手法で分析した。

3. 考察

上記データから、成功した選手ほどドーパミン依存が強調され、引退後の将来に対する選択肢を模索する余裕がないことが浮き彫りになった。最後に、清原氏の覚醒剤使用に対する見解には現役と元選手の間で差異があり、引退選手はセカンドキャリアの難しさに理解と同情を示した。

4. 結論

以上のことから、プロ野球選手の引退後のドーパミン依存症は、成功や名声によるプラスの感情だけでなく、マイナスの感情が大きく関与しているといえる。特に成功経験が豊富な選手ほど、引退後に過去の栄光とのギャップに苦しみ、心理的な空虚感を感じやすい傾向がある。そのため、プロ野球選手のセカンドキャリアにおいて、仕事や収入だけでなく、メンタルヘルスにも注意を払うことが重要である。本論文では、現役中から引退後の生活に順応する課題を理解し、選手自身と周囲がお互いにサポートし合うことが不可欠であることを明らかにした。

努力は報われないと思う人が報われると思うには何が必要か

田中研之輔ゼミ・20M0313・澤勇樹

1. 目的

本研究は、努力は報われないからやっても意味ないと思う人が少しでも報われると思えるような知見を見出していくことを目的としている。先行研究ではステータスや自身の特徴に焦点が当てられており、再現するには難易度が高いと感じた。それよりも私は、個人の思想や経験に価値と再現性を感じ、個人の思考法や行動について調査した。

2. 方法

本研究では努力は報われると思えるために、努力肯定派の人らに質的調査（2023年11月に実施、対象者5名）を実施し、データを収集し、分析を行った。

3. 考察

調査の結果を受けて、努力は報われると思い直すために必要なことを以下に考察した。まず、捉え方を「正しい努力を結果が出るまで行う」「やるべきことをやりきる」のどちらかにすること。次に、失敗体験の経験量や成功失敗の比率は思想に関係がないこと。更に、現在挫折している場合、その乗り越え方は、結果が出た後にそれに至った理由の分析し、挫折へのポジティブな捉え方をすること。また今後、何か挑戦しようとした時は、3点を意識する。1つ目は前提として自分に向き合い行動し続けること。2つ目は目標と自分の乖離を分析し、論理的に考える思考を持つこと。3つ目は必要に応じて目標を下げ、ロードマップを作成し少しずつ成功体験を積み上げる行動をすることである。最後に、努力の理論・方程式に当てはめ行動すると尚良く、それは「行動量×分析・振り返り×適性フィールド（勝てる場所）×行動の質×外部要因の大きさ」である。

4. 結論

上記5点を実行することで報われると思える可能性が高まると言える。一方で残った課題もあった。インタビュー対象者の量・属性が固まった点・報われないと思っている人は調査対象外な点・自力での改善法以外に焦点が当たっていない点だ。そのため今後はこれら4点を意識した調査・研究を行えば、更なる発展へと繋がる。

ダークツーリズムによる記憶の継承と心理的影響

田中研之輔ゼミ・20M0605・佐藤凜

1. 目的

本稿では「ダークツーリズム」という観光の新概念を紹介し、その両義性とそれによる心理的影響を明らかにし、私たち大学生がどのようにこのツーリズムと向き合うべきかを導き出すことを目的としている。筆者は、ダークツーリズムを題材とした Netflix のドキュメンタリー番組、デヴィット・フェアラー脚本の「世界の”現実”旅行(Dark Tourist)」をきっかけにダークツーリズムという概念に興味を抱いた。

2. 方法

本研究では、ダークツーリズムの両義性とそれによる心理的影響を明らかにするために、同学年の大学生3名を対象にしたインタビュー調査(2023年11月実施)を用いてデータを収集し、それらをテーマ分析の手法で分析した。

3. 考察

インタビュー調査と文献調査から、ダークツーリズムの両義的な効果や、参加経験が平和や戦争への理解を深める機会を得ていること、恐怖的经验から記憶に印象付けがされていること、次世代への継承の重要性を重視している姿勢が明らかになった。

4. 結論

以上のことからダークツーリズムには、歴史的な出来事とその影響を体験する機会を得られることや自身の人生や価値観を再評価する機会を得るため、自己成長につながるといったポジティブな面がある。一方で被害者の尊厳を不当に傷つける可能性があることが判明した。

その両義性を加味し、歴史の事実を知ることと実際に訪れることの違いを理解することで有意義なツーリズムを体験できると考える。そしてそこで得た知見や経験を次世代に継承していく必要があり、その際もリスクを考慮していくことが大切である。平和を祈るだけでなく、過去を身をもって知り、平和をつくる努力をしていかなければならない。そのためにもダークツーリズムを安定的に継続させていく必要がある。

大学生の「やりたいこと志向」と今後のキャリア選択の関連性

田中研之輔ゼミ・20M0614・植木紗羅良

1. 目的

大学生の「やりたいこと志向」と今後のキャリア選択の関連性を実証的に検証する研究は少ない。そこで本研究の目的は、大学生自身のこれまでの経験を通じて、「やりたいこと志向」を形成することが、将来のキャリア選択にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることにある。

2. 方法

大学生の「やりたいこと志向」と今後のキャリア選択の関連性を明らかにするために、本研究では、大学生7名を対象にしたインタビュー調査（2023年10月実施）を行い、大学生のキャリア形成と「やりたいこと志向」の関連性を明らかにするためのデータを収集した。

3. 考察

本研究の調査から、大学生は、将来の理想と現実のギャップを埋めるために、目標の修正や新たな選択肢の模索、自己評価や再評価、自己変容や社会的な可能性の変化を待つ姿勢など、柔軟な思考と行動の修正を行っていることが明らかになった。大学はこのプロセスを支援する重要な場であり、大学生は有効に活用する必要がある。

4. 結論

以上のことから、大学生の「やりたいこと志向」と今後のキャリア選択は、必ずしも一致するものではないことが明らかになった。

キャリア選択は、人生を豊かにする大切な決断であり、自己の関心や情熱、価値観を反映した仕事に従事することが重要である。自己成長は、能力やスキルの向上、知識の獲得、経験の積み重ねなどを通じて促進される。また、目標や価値観を明確にすることも重要であり、自己の人生に意味のある道を歩むために仕事を選ぶべきだと考える。キャリア選択は、一度決めたら終わりではなく、柔軟な思考と行動を持って、自己の成長と幸福を追求するために新たな方向性を模索する必要がある。キャリア選択は自己成長と幸福を追求する旅と捉えるべきである。

大学生における苦しみからの脱却と成長 ～心的外傷後成長とストレス関連成長の観点から～

田中研之輔ゼミ・20M0807・金山志穂

1. 目的

本研究は、大学生における苦しみやストレスからの脱却と、それによる成長のプロセスをより明確にすることを目的としている。悲しみや困難における成長については、心的外傷後成長（PTG）やストレス関連成長（SRG）などの概念として研究が重ねられてきた。しかし、その研究の大半は量的調査による分析である。そこで、本研究ではこれまでの PTG と SRG の研究を俯瞰し、成人期における困難を経ての成長が発生するプロセスについてインタビュー調査を通して検討する。

2. 方法

本研究では、苦しみやストレスを経た成長のプロセスやトリガーをより明確にするため、インタビュー調査を 2023 年 10 月 20 日、同年 11 月 11 日、同年 12 月 1 日に行った。それぞれ半構造化インタビューの技法を用い、国内の大学に通う大学生 3 名に調査を行った。

3. 考察

インタビューの結果から、以下の 4 点を考察した。第一に、成長の過程で他者の視点があることである。成長の際に他者との比較が行われることは先行研究によって明らかにされているが、PTG や SRG などの苦難を経ての成長においても、他者との比較において自己を評価しようとする心理が作用することがわかった。第二に、困難を経ての成長が自分自身のアイデンティティの再定義に繋がっていることである。第三に、困難を乗り越えることができたという実感が、自己肯定感や自信につながりレジリエンスが形成される。第四に、「語り」によって人は自分の成長を実感するということである。

4. 結論

成人期における困難を経ての成長のプロセス、トリガーについて検討したが、成人期特有のものであるか否かに関しては解明できなかった。今後の研究においては、PTG や SRG といった概念の普及のため、世代や文化と成長のプロセスの関連性についての研究が求められる。

ChatGPT を活用した卒業論文の書き方 ～大学生と生成 AI と大学～

田中研之輔ゼミ・20M1008・幸田純徳

近年、ChatGPT を代表とする生成 AI は、自然言語の理解と生成能力で飛躍的な進化を遂げている。膨大なデータから学習したモデルを活用し、ユーザーからの質問に対して人間らしい回答を生成できる。この特長から、生成 AI は論文やレポートといった学術文章のサポート的役割として自動作成に大きな可能性を秘めていると考えられる。

そこで、本研究では質的調査法(3名にインタビュー調査)を用いて ChatGPT が大学生の卒業論文作成にもたらす影響と有効性について調査した。

調査の分析から、学生たちが ChatGPT を含む生成 AI を教育的文脈でどのように使用しているかについての深い理解を得た。ChatGPT を上手く使いこなせば、学生は文献レビューや調査の労力を軽減し、論理的構成力や創造性といった人間ならではの高度な知的活動に注力することが可能になることがわかった。しかし、AI が人間の創造性を完全に置き換えることはできないということも調査から明らかになった。また、AI の倫理的使用と教育現場での受容度に関する問題も浮かび上がった。

本論文の結論として、ChatGPT を始めとした生成 AI の適切な使用方法と倫理的な考慮に関するガイドラインが必要であることを述べる。「大学生向けの AI 活用ガイドライン」と「教育機関向けのルール設定ガイドライン」の両方を策定することで、学生の学習効率と AI リテラシーの向上、創造的協働の実現を目指す。

2023 年は生成 AI の分野における重要な進展が見られた年と言える。この新しい技術は学術研究に大きな影響を与えており、学生たちがこの技術を利用して互いに利益をもたらす関係を築く方法について考えることが重要である。本研究は、そのような関係の構築方法を考察する機会となることを願っている。この文書が、現在これを読んでいる大学生たちの貴重な学生生活の一助になれば幸いである。

コロナ禍での大学生の停滞感と そこからの脱却についての質的研究

田中研之輔ゼミ 20M1201 M組 保田恵汰

1. 目的

本研究は、コロナ禍における大学生の停滞感と回復プロセスを明らかにすることを目的としている。なぜならば、コロナ禍による外出制限などが大学生の生活の流れを止め、大学生活に大きな停滞感を生じさせているからである。「With コロナ」「アフターコロナ」が叫ばれる今、その停滞感からの回復プロセスは未解明な部分が多く、大学生への支援を考える上でその解明が必要であるからである。

2. 方法

本研究では、コロナ禍における大学生の停滞感と回復プロセスの解明のために、2020年度入学の大学生に関して、半構造化インタビュー(2023年12月に実施、対象者6名)を用いてデータを収集し、それらをテーマ分析の手法で分析をした。

3. 考察

インタビュー調査から、コロナ禍における大学生の停滞感は外出制限だけでなく対面での交流機会減少が大きく影響していることが示唆された。特に環境変化が大きい入学時にその影響が大きかった。一方で時間の経過と制限緩和に伴い、自己実現意欲が回復する姿も見られた。外的制約と内面性の相互作用が停滞と回復を生み出していることから、大学では学生の内面を重視し、対面交流と自発性を高める教育が必要である。コロナ禍を教訓に、学生の内面を支え対面交流の場を与えることが大切だと明らかになった。

4. 結論

以上のことから、コロナ禍によって大学生生活の幕開けを迎えた2020年度入学者が感じた強い停滞感と、そこからの脱却プロセスについてインタビュー調査結果をもとに検証を行った。コロナ禍の影響は入学当初が最も大きく、対面での交流機会が制限されたことで動機付けを失い精神的ストレスを抱える学生が続出した。脱却のタイミングには個人差があったものの、対面授業の増加など学生生活の制限が緩和され、自分の想いを共有できる仲間と時間が増えたことで停滞感は払拭された。調査結果から、停滞感の原因は単なる行動制限だけでなく、人との交流機会の減少にあり、脱却には他者との連帯感の醸成が重要であることが示唆された。

大学生における先延ばし傾向と学業遂行の関連性

田中研之輔ゼミ・20M1415 密原玲奈

1. 目的

本論文は、「先延ばしと学業遂行」に焦点を当て、先延ばしをパターン分けし、分析をおこなうことで、大学生活において、「先延ばしを行うことは、本当に学業遂行に影響を与えるのか」という問いを明らかにすることを目的とする。なぜならば、コロナ禍では、単位の取得に対する「レポート提出」の割合が高くなったことにより、レポートの締切との戦いという大学生特有の問題の比重が大きくなったからである。

2. 方法

本論文では、先延ばしのパターンと学業遂行の因果関係を明らかにするために、大学四年生4名を対象に半構造化形式でのインタビュー調査を行い、データを収集した。

3. 考察

先延ばしを行わない層は計画的で問題意識があり、先延ばし中には否定感情が生起する一方で、学業成績は優秀な傾向が見受けられる。彼らは先延ばしを治したいとの強い意識があり、その背景には「よりよい生活」や「優れた成績」を追求する動機があることが明らかになった。一方で、「先送り傾向のある学生」とされたグループでは、先延ばしによる不利益が大きくても、罪悪感や焦燥感を感じにくい傾向が見られた。成績が低くなったり留年したりするなどの実害が生じても、これらの感情が抑制されていることが認められた。

4. 結論

本論文では、「先延ばしと学業遂行」に焦点を当て、先延ばしをパターン分けして大学生の学業への影響を検討した。結果として、先延ばしを行う学生は多様性があり、単純な区別が難しいことが判明。また、先延ばしの原因には一貫性がなく、無意識の行動が多いことが明らかになった。

学業への影響については、大きな課題のみを先延ばしにする層は成績が良く、高い学業遂行を目指している一方で、小さな課題まで先延ばしにする層は学業への悪影響が大きいと示された。また、これらの知見は、学業支援や先延ばしの防止において個別対応が必要であり、柔軟なアプローチが求められることを示唆している。